

第31回日本受精着床学会

2013.08.08-09 大分

胚盤胞の再凍結が融解後の胚ならび出生児に与える影響

¹IVF 大阪クリニック、²IVF なんばクリニック

¹幸池 明希子、¹水野 里志、¹福田 愛作、¹森 梨沙、¹藤岡 聡子、¹片岡 信彦、
¹井田 守、²森本 義晴

【目的】近年、単一胚移植の推奨などから凍結融解胚移植周期が大幅に増加している。これに伴い、融解胚移植後の余剰胚の凍結、すなわち胚を再凍結する症例も増加している。これまでに、再凍結胚の発生能についていくつかの報告があるが、それらは数例の症例報告であり、出生児の予後を含めた再凍結の胚に与える影響を詳細に解析した報告はない。そこで、今回我々は胚の再凍結が融解後の胚発育ならびに児の予後にどのような影響を与えるか解析したので報告する。

【対象と方法】2006年3月から2012年9月の間に胚盤胞を再凍結し融解後に胚移植を実施した200症例を対象とした。同時期に胚盤胞の凍結融解胚移植を実施した1254症例を対照群として、融解後の生存率、胚移植後の妊娠率ならびに流産率、出生児の先天異常率を比較した。

【結果】再凍結群ならびに対照群の融解後の胚の生存率は94.0%(219/233)、97.8%(1405/1436)($P<0.01$)、胚移植後の妊娠率は39.5%(77/195)、48.1%(603/1254)($P=0.025$)、妊娠成立後の流産率は23.4%(18/77)、11.4%(69/603)であった。出生児はそれぞれ41名(男児19、女児20、不明2)、310名(男児162、女児142、不明3)で、児の先天異常は再凍結群では認められず、対照群で2.28%(7/307)であった。

【考察】今回の調査では、胚の生存率には有意差が出たことから再凍結による胚質の低下が影響しているのではないかと考えられた。妊娠率の低下と流産率の増加は、初回の凍結周期で最良好胚を既に移植したことが影響している可能性があると考えられた。再凍結胚を由来とした児においては出生時では先天異常は認められなかった。しかし、発達過程において先天異常が判明する例もあるので継続して追跡調査を行い、胚の再凍結の安全性を確認していきたい。